

シンボルに焦点を当てた童話の比較分析

アンデルセンの『人魚姫』と、小川未明の『赤い蠟燭と人魚』

佐藤 美里

(山 愛美ゼミ)

私は、幼い頃にアンデルセンの『人魚姫』をか
わいそうな話、小川未明の『赤い蠟燭と人魚』を
怖い話だと感じたことを覚えている。また、両方
を悲しい話だとも思った。創作童話を多数書いた
アンデルセン、日本のアンデルセンと呼ばれる小
川未明、この二人の描いた人魚が主人公である二
つの童話には、多くの共通点がみられる。その共
通点には、人魚が主人公であること、陸に憧れる
人魚が登場すること、主人公の死で物語が終わる
ことなどがあげられる。また、人魚のたどる運命
が悲しいものであったということも共通している。
創作童話は、長い歴史の中で浄化に浄化を重ねて
きた心の抽出物といえる昔話とは違い、作家個人
の感情が介入していると考えられる。しかし、西
洋と日本という土地の違いから昔話に差異が見ら
れるように、創作童話にも差異がみられるのでは
ないだろうか。森 (1997) は、創作童話について
「昔話のモチーフや手法だけでなく、有形無形の
影響を受け、その本質を受け継いでいる部分が少
なくない」と述べている。

本論文では、アンデルセンの『人魚姫』と小川
未明の『赤い蠟燭と人魚』に登場するシンボルに
焦点を当てて物語を比較分析し、物語の相似点、
相違点について検討する。

『人魚』について

人魚についての童話を分析するに当たって、そ
もそも人魚がどういう風に生まれ、歴史的にどの
ように捉えられてきたのかをみていく。

1. 西洋での人魚 吉岡 (1998) によると、西洋
での最も古い半身半魚の像は、パピロニアで崇拜
されていたオアンネス (Oannes) という海神だ
という。このオアンネスは海を支配し、パピロニア
の各港町では航海の安全を祈る対象としてあがめ

られていたようである。昼は王として陸上において、
夜は海に帰る神だと信じられていたため半身半魚
とされていたようだ。しかし、西洋で現在の人魚
のモデルとなっているのは、セイレン (Seiren)
と呼ばれる上半身が女、下半身が鳥の姿の動物で
ある。セイレンの初見はギリシア神話で、最古の
文献はホメロスの書いた叙事詩『オデュッセイア』
だと言われている。『オデュッセイア』に登場す
るセイレン島の海の精セイレンは、人を魅了する
歌をうたう。これに迷わされた舟人たちは、島に
行こうとして海に飛び込み、セイレンのエサになっ
てしまうという。『オデュッセイア』以来、セイ
レンは海のほとりに住み、その歌声には魔力があ
り、鳥身の女性の姿とされた。しかし、8世紀頃
に半身半魚のセイレンのイメージが、スキュラ
(skylla) というローマの怪物から生まれた。この
スキュラは人面で上半身は少女、腹は狼、尾はイ
ルカという動物で、小鮫をつき従え、不運な難破
船を粉碎するといわれるものである。西洋ではこ
のようにして、現在の人魚像が出来上がったよう
である。

2. 日本での人魚 神谷 (1989) によると、日本
での最も古い人魚の記録は、『日本書紀』だとい
う。発見当初、日本には「人魚」という言葉は無
く、この動物の名前がわからなかった。「人魚」
という言葉が使われ始めたのは、奈良後期と考え
られている。当時の日本は中国から新しい知識を
導入することに懸命だったようで、平安末期の
『和妙類聚抄』という辞書の「人魚」という項目
には、中国の『山海経』をもとに人魚の説明が書
かれている。それによると、人魚は別の名をりよ
う魚といい、体は魚、顔は人というなりであり、
『山海経』の注によると、小児のような鳴き声だ
という。『山海経』とは中国の古代の地理書で、

さまざまな奇怪な想像上の動物が描かれている。そのなかで、人魚は「てい魚」に似て四足であり、声は小児に似ており、これを食べると痴呆にならないと説明されている。「てい魚」がどんな動物かはわからないが、オオサンショウウオ、トビハゼなどだったと考えられている。『山海経』には人魚の他に、人面魚身の動物がいくつか出てくるが、「人魚」はあくまで魚であって、人面ではなかった。しかし、いつの頃からか、人魚=てい魚となり、日本に入ってきたと考えられている。江戸時代中期以降に西洋の人魚の知識が入り、西洋と同じ人魚像が出来上がったと考えられる。

このようにして、世界共通の人魚のイメージが確立していったようだ。人魚が実在の生き物だと考えられていたのは、西洋ではマナティーを、日本ではオオサンショウウオやトビハゼを人魚と見間違えた人がいたためである。また、中国や日本の漁師たちが魚の尾と猿の上半身を縫い合わせ、人間の歯並びを入れて人魚の偽者を作っていたことも関係しているだろう。そのため、20世紀初頭まで人魚は実在する生き物として捉えられていたようである。

3. 心理学的視点からみる人魚

(1) 人魚と無意識の関係 Jung (1954) は、人魚などの水の精は「われわれがアニマと名づける妖しい女性的な存在のより本能的な前段階である」という。そして「これらは若者を惑わし、その生命を吸いとってしまう」と述べている。また、アニマは無意識の一つの相であり、アニマに関することはすべてヌミノース（聖なる）な性質をもつため、絶対的で危険で、タブー的で魔術的になるという。von Franz (1975) は「心理学的には、魚は無意識の遠く近づきにくい内容、可能性を含んではいるが明瞭性に欠ける一定量の潜在的エネルギーです。それは心的エネルギーの、比較的不確かかつ不特定の量を示すリビドーの象徴」と述べている。このように、心理学的視点からみると、人魚は無意識の世界と深い関わりをもっていると言えるようだ。人魚が危険な存在とされるのは、無意識という我々のコントロールできない世界との関わりが深いからだろう。また、人魚はアニマの前段階、リビドーの象徴とされることから、人

間の性的本能の象徴だと解釈できる。無意識と関わりの深い人魚は、下半身が魚の身体であるため人間の性器を持たない。つまり、人魚は人間が無意識世界に閉じ込めた、性的本能の象徴的存在だと考えられる。

(2) 半身半獣としての人魚 人魚は、上半身は人間、下半身は魚の姿とされているが、このような人間と他の動物の姿を合わせ持った生き物が、宗教や芸術の中にも氾濫している。エジプト人は女神ハト・ヘルを雌牛の頭、神アモンを牡羊の頭をしたものとしている。また、ヒンズーの幸運の神ガネシャは人間の胴体を持ちながら、象の頭をしている。ギリシア神話や、キリスト教の中にも様々な動物象徴が出てくる。Jung (1964) はこのような動物象徴は「精神の内容 すなわち本能を統合することが、人間にとってどれほど重要なことを示している」といい、「人間のなかにある動物的存在（それは人間のなかに本能的心性として住んでいるものだが）は、それが認識され生活全体のなかに統合されるのでないのならば、危険な存在になろう」と述べている。半身半獣という存在は、人間が動物の一種であるということを強く表しているもののように考えられる。人間が理性によって日々の生活の中では公にすることのできない、本能の存在を動物象徴は示しているのだ。

・ 物語の比較分析

人魚のでてくる童話は、世界に多数存在する。これは人魚が他の動物と同じように、多くの人に架空の生き物としてではあるが、認められていることの表われだと考えられる。つまり、科学的に人魚が架空の生き物だとわかってからも、人魚の神秘的な魅力は生き続けているのだ。そこで、人魚が主人公として登場する『人魚姫』と『赤い蠟燭と人魚』の二つの童話について比較分析をしていきたい。本論文では、二つの童話に共通点が多くみられることから、童話に共通して出てくる人物や場所などに焦点をあて比較分析する。

1. 人魚にとっての海（日常世界）

『人魚姫』、『赤い蠟燭と人魚』は共に、海という人魚にとっての日常世界から物語が始まる。人間は普段、陸地で日常生活を送る。そのため、人間にとっては陸が日常世界だといえる。反対に、

人間が日常生活を送ることのない空や海は、人間にとっては非日常世界であるといえる。飛行機に乗って空を飛んでいても、船に乗って海の上に乗っていても、陸という日常生活を送る場に戻ることが前提であるから、私たちは空や海という非日常世界にいても安心した気持ちでいられるのだ。もし、非日常世界から戻ってこれないという状況に陥ったら、私たちは落ち着いた気持ちではいられなくなるだろう。人間にとって住みやすい陸地が人間の日常世界であるように、人魚にとって住みやすい海が人魚にとっての日常世界なのである。『人魚姫』には、「水は一番美しいヤグルマソウの花びらのように青く、このうえなくすんだガラスのようにすんでいます」というように、美しい海についての描写がされている。しかし、『赤い蠟燭と人魚』には、「雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見ても限りない、ものすごい波がうねうねと動いているのであります」というように、寂しい海についての描写がされている。両方の童話に海についての描写が出てくるのだが、登場する人魚の海の捉え方は違っている。Jung (1954) は、「水は無意識を表すために一番よく使われるシンボルである」と述べている。このことから、海という場所は無意識の世界と捉えることができる。また、人魚は無意識の世界の住人と捉えることができる。『人魚姫』に出てくる海の底の花には、香りが無い。そして、人魚はどんなに悲しくても涙がでないとされる。また、『赤い蠟燭と人魚』の母人魚が考え事をするのは、海の中ではなく、海の面であるとされる。このことから、海は無意識の世界であるため、陸という意識の世界に比べて様々な感覚が乏しいのだと考えられる。

2. 人魚にとっての陸 (非日常世界)

(1) 陸への憧れ 人魚姫は、海での生活より、陸での生活に大きな魅力を感じている。それは、陸には人魚姫が好きになった人間の王子が暮らしているからである。また、陸で生活するということは、人間の姿になるということであるため、人魚にはなく人間にはあるという永遠の魂を手に入れられると考えているからだ。

母人魚が陸に憧れを抱いているのは、「長い年月の間、話をする相手もなく、いつも明るい海の

面をあこがれて、暮らしてきたことを思いますと、人魚はたまらなかつたのであります」とあるように、海での暮らしがとても寂しいものであると感じているからだ。陸に憧れる理由に違いはあるが、人魚が陸に憧れを抱いているという点は共通している。

人魚姫は、自分で望んで陸での生活を始めた。そのため陸での生活は、好きな王子の側にいられるという自らの望んだものであったから、人魚姫は陸での暮らしを仕合わせだと感じていた。これに引き換え人魚の娘は、自分で望んで陸での生活を始めたわけではないので、母人魚のいる海を恋しく思い、海での生活を送りたくてたまらなかつた。人魚の娘が陸での生活を送らなくてはいけないのは、母親が冷たい、暗い、気の滅入りそうな海よりも、にぎやかで、明るい、美しい町(陸)の方が娘は幸せに暮らせると考えたからだ。この、海より陸での生活の方が良いというのは人魚の母親の価値観であり、娘の価値観ではない。つまり、母の娘への愛情が結局は、自分への愛情に過ぎなかつたということの表れなのだ。

(2) 陸生活のはじまりかた 人魚姫は、陸で生活するために二本の足が欲しいと魔女に頼む。すると、魔女は人魚姫に足のはえる薬を作る代わりに、人魚姫の美しい声が欲しいと言う。何としてでも人間の姿になりたい人魚姫は、この条件を受け入れる。こうして、人魚姫は二本の足を手に入れるために自分の美しい声を失い、足を手に入れてからも歩くたびに鋭いナイフを踏んで、血を流す思いをしなくてはならなくなる。このように、人魚姫は悪条件を呑むことで人間の足を手に入れて、人間の容姿になることで人間の世界(陸)で生活できるようになる。これに対し『赤い蠟燭と人魚』の人魚の娘は、母人魚の意思で人間の世界にすんなりと住むことができている。また、母人魚は、人魚は人間と心も姿も似ていると考えている。そのため、人間の世界で暮らせるだろうと言うのだ。しかし、『人魚姫』の祖母は、海の底では美しいとされる魚の尻尾が陸の上では醜いものと思われているといい、人魚が陸で暮らすことは容易なことではないと述べている。このように、日本と西洋の童話には人間と他の動物との境界に違いがみられる。河合 (1982) は日本の異類女房譚につい

て「もともと動物であったものが人間に姿を変えて（あるいはそのままの姿で）結婚しようとするが、結末は幸福な結婚につながらない」と述べている。また、西洋の異類女房譚については「もともと人間だったのが魔法で動物とされ、それがもとかえって結婚するという筋になる」と述べている。このように、人間と他の動物との境界があいまいな日本の物語では、人魚が突然、人間に混ざることができるのだ。しかし、人間と他の動物との境界がはっきりしている西洋の物語では、動物の姿から人間の姿に変わること、人間に混ざることができるようになっていく。

3. 太陽と月の出現 『人魚姫』の物語の中に太陽と月が、『赤い蠟燭と人魚』には月のみが度々出てくる。太陽は眩しいほど明るい光で世界を照らし、月はぼんやりとした明かりで闇夜を照らしている。太陽と月を比べると、太陽は明るく活発なイメージであるのに対し、月には太陽のような明るさはなく静かなイメージが浮かぶ。Lurker (1990) は「惑星の象徴的意味を極端に単純化して縮めていけば、太陽は光とダイナミズム（精神的エネルギー）、月は受容と豊穡（反応する機能）」と述べている。von Franz (1975) は月について「女性原理の象徴であり、内的外的世界に対する女性的態度、変容的な、生じてくることを受け入れ銘記してゆく態度を意味しています」といい、太陽について「無意識における意識の源の象徴」と述べている。

(1) 月の役割 人魚姫が王子の御殿に王子の姿を見に行っていたのは太陽ではなく、月の出る時間帯である夜であったり、人魚姫が陸に上がっていったのは月の明るい時であったりと、人魚姫が王子（陸）と関わりを持つ節目の時には月が見られた。そして、人魚姫が海の泡となって消えてしまったのは、太陽の光を浴びたときであった。人魚の娘は、月のいい晩に老夫婦に引き取られ、月の明るい晩に香具師に売られた。このように、人魚の娘にとっての節目の時にも月が登場している。人魚姫と人魚の娘は共に、月の出ている夜という時間帯に陸との接点を持った。これは、月の象徴的意味が受容であることと関係していると考えられる。人魚にとって非日常世界である陸と接点を持つのは、受容を意味する月の出ている時間が望ましかつ

たのだ。ぼんやりとした月明かりの中では、周囲をよく見わたすことは出来ない。つまり、人魚の姿を人間に見られる可能性もその分少ないと言える。

(2) 太陽の役割 人魚姫が好きになった王子が人魚姫以外の女性と結ばれることになった日の翌朝、人魚姫は太陽の光を浴びて海の泡になってしまった。これは、未来の王様である王子が新しい支配的な存在になることが結婚によって意識され始めたことで、太陽という意識の象徴によって、海という無意識の世界の生き物である人魚は意識の世界である陸にいらなくなったことが表されていると考えられる。

『赤い蠟燭と人魚』には太陽は出てこないが、その代わりに蠟燭が出てくる。Lurker (1990) は、「民間信仰やメルヒェンでは、蠟燭が生命の光を暗示する」という。蠟燭は物語の中で、人魚が人間と調和を保っている間は、海の難船を防ぐお守りとして出てくる。しかし、人魚が人間に裏切りを受けてからは、難船を招く不吉なものとして出てくる。蠟燭が生命の光を暗示するということから、蠟燭に灯った火は、生命の火だと考えられる。そして、蠟燭作りという仕事は、人の生命を作る仕事だといえる。人魚の描く絵には、その絵をみると、誰でも蠟燭が欲しくなるように、不思議な力と美しさがこもっていたという。誰でも蠟燭が欲しくなるということを言い換えれば、誰もが命を手に入れたいと思っている、ということになる。

『人魚姫』では、太陽が赤色とされている。『赤い蠟燭と人魚』では、蠟燭に絵を描く絵の具が赤色とされている。『図解 世界の色彩感情事典』によると、赤は危険が連想される色だとある。しかしその反面、赤という色は嗜好度の高い色でもあるようだ。河原 (1988) は、「赤という色相は興奮、歓喜、緊張、活動をイメージさせる」という。このことから、童話の中で太陽と蠟燭が、危険を予告する役目を担っていると考えられる。人魚姫は太陽が好きで、赤という色も好んでいた。しかし、人魚姫にとって太陽は、陸との別れをもたらす象徴となってしまったのだ。つまり、太陽は人魚姫の命を終わらせる危険な存在として描かれたといえる。また、人魚姫が魔女に作ってもらった薬には、魔女の血が混ぜられていた。この赤い

血も、人魚姫に危険を示す色として出てきたといえる。人魚の娘は、自分が香具師に売られて行く悲しい思い出の記念に、赤い蠟燭を残した。その赤い蠟燭を見た母人魚が娘の悲しみを察したことによって、母人魚は海に嵐を起こし、老夫婦の住んでいた町を滅ぼすに至った。つまり、赤い蠟燭は母人魚を怒らせる危険な存在になったといえる。しかし、赤という色が歓喜、活動をイメージさせるという面も『人魚姫』には出てくる。太陽の光によって死を迎えた人魚姫であったが、空気の娘となってからは太陽との共存が可能となり、人魚にはなかった涙も手に入れた。人魚姫が海という無意識の世界を脱したことが、ここに示されているようだ。

4. トリックスターの登場 河合 (2002) は、「トリックスターとは世界中の神話・伝説・昔話のなかで活躍する一種のいたずらもので、策略にとみ神出鬼没、変幻自在で、破壊と建設の両面を有しているところが特徴的である。トリックスターの自由さは、一般常識に縛られずに真実を見る能力につながるが、それはまた危険なことでもある」と述べている。林 (1990) は『続・元型論』のトリックスターについて、悪戯者、詐欺師、悪漢という意味であるが、これは人類学や神話学において、神話の中の独特の性質をもった登場人物を指す言葉で、反秩序、愚鈍、狡猾なトリックを使って騙し、それによって自分の欲するものを手に入れるという性質を持っている、と解説している。筆者は、『人魚姫』の魔女、『赤い蠟燭と人魚』の香具師がこのトリックスターにあたるかと考える。魔女も香具師も反秩序的な行動をしており、人を騙すことで、自分の欲しいものを手にいれているからである。

(1) トリックスターとしての魔女 『世界シンボル大事典』(1996)によると「Jungは魔女が男性の「アニマ」、すなわち男性の無意識に存続する原始的な女性的側面の投影であるとみなす。魔女は自らほとんど袂い退けられない憎しみの影を具現化したものであり、同時に恐るべき力を身につける」とある。また「魔女は女性の理想的なイメージの逆である」ともある。人魚姫が魔女を訪ねたとき、魔女はなぜ人魚姫が自分を訪ねてきたのかを知っていた。そして、人魚姫に人間の姿になる

と不仕合わせになると忠告した。しかし、その忠告は建前で、すぐに薬を作り始めた。魔女は人魚姫に人間の足のはえる薬を作る代わりに、人魚姫の美しい声を欲しがった。人魚姫は、自慢の美しい声を失くしたら、何が残るだろうと魔女に訊く。すると、魔女は美しい姿や軽い歩きぶりや、ものをいう目があるから人間の心を夢中にさせるくらい簡単だと人魚姫をそそのかした。また、未来のことがわかる魔女は、人魚姫のお姉さんたちが妹を助けて欲しいと、自分を訪ねてくることもわかっていたのではないだろうか。つまり、魔女は人魚姫が自分を訪ねてきた時点で、人魚姫の美しい声と、人魚姫の姉たちの美しい髪を手に入れられることを知っていたと考えられる。このように魔女は、自分のことを第一に考える我儘な面を持っており、反秩序的な存在として物語に登場している。魔女が理想的な女性の逆とされることから、人魚姫は理想的な女性だと考えられる。人魚姫が美しく描かれれば描かれるほど、魔女は醜くい存在として描かれるからだ。

(2) トリックスターとしての香具師 『日本民俗事典』(1972)によると香具師とは、「明治以降、てきやとも言う。今ではやくざと同類視され、祭祀・縁日などで屋台店・見世物店を開いたりして、まやかしものを売るとかインチキな興行をするものになっている」とある。添田 (1981) は、製薬を売り歩く薬師がヤシと呼ばれるようになり、その薬師が薬と共に香や香具も売り歩いたのが香具師の由来だという。恥ずかしがりやの人魚の娘は、人前に姿を現すことが少なかった。それなのに、香具師はどこで人魚のことを知ったのか、老夫婦のもとに現れる。香具師は大金を払う代わりに、人魚が欲しいと老夫婦に取り入った。はじめは人魚を渡すことを断っていた老夫婦であったが、人魚は不吉だという香具師の言葉に乗せられ、老夫婦は人魚を手放す決意をした。このようにして、香具師は人間の欲を表面化させたのだ。

このように、魔女にも香具師にも世間一般には悪いイメージがある。童話の中でも魔女と香具師は、善悪でいうなら悪の立場にたっている。また、二人の登場で話の流れは一気に変わる。物語におけるトリックスターの役割は、とても大きいもの

なのである。

5. 死という結末 物語の結末で人魚姫と人魚の娘は、海で死をむかえたと考えられるため、物語は人魚にとっての日常世界で終わったと考えられる。河川や海などの水中で生活する魚の体と、陸地で生活する人間の体を半分ずつ合わせ持つ人魚は、海に住む生き物とされている。つまり、人魚は人間にとっての非日常世界に住んでいる生き物なのである。その人魚が、人魚にとって非日常世界である陸に憧れ、陸に住むということは、非日常世界で日常生活を営もうとする行為であるといえる。それが上手くいくはずがないのは、目に見えていることである。これは、人間がいくら海に憧れを持っているからといって、水中で生活できないのと同じことだ。陸で生活することが、人間の宿命であるのと同じように、人魚は海で生活することが宿命なのである。

山(1998)は、「メルヘンの始まりには欠如あるいは欠如を生み出す加害が存在し、それが充足されていく過程が物語に描かれている」と述べている。また、「これらをすべて心の中の内的なできごととしてとらえていくと、それらは心のどの領域に問題が生じてきており、それがどのように今から克服されていくのかを示していると考えられる。この充足のプロセスを心の成長のプロセス、あるいは自己実現へのプロセスという観点から読むことができる」という。つまり、欠如部分が充足されていく過程を見ていくことで物語の主人公の心の成長が見られるということなのだ。これを二つの童話に当てはめてみる。人魚姫は、永遠の

表1 「人魚姫」と「赤い蠟燭と人魚」の相似、相違

作品名	『人魚姫』	『赤い蠟燭と人魚』
海	美しいところ	寂しいところ
陸	人魚の世界よりもずっと大きいように 想い、陸という道の世界に憧れる	海とは違い、にぎやかで明るく、 美しい陸に憧れる
人魚の容姿	人間にとって人魚の尻尾は醜い	人間とたいして変わらない
陸での姿	人間の姿になる	人魚の姿のまま
陸との接点の象徴	月	月
陸との別れの象徴	太陽	赤い蠟燭
トリックスター	魔女	香具師
結末	海の泡になって消えるが、 空気の精に生まれ変わる	海で嵐にあって死ぬ
物語の構造	西洋の見るな座敷に似ている	日本の異類女房譚に似ている

魂を手に入れたいと願っていた。最後には、永遠の魂を手に入れる可能性を持つことができ、話は終わる。人魚の娘は、海での暮らしを夢見ていたが、香具師によって見世物にされそうになる。しかし、香具師によって船に乗せられた日に暴風雨が起きたため、人魚の娘は死んでしまったと考えられる。そのため、人魚の娘の心の欠如部分は充足されないが、人魚姫は、永遠の魂を手に入れたいという望みが叶うであろうから欠如部分が充足される形で話が終わるといえる。

作者について

創作童話には、昔話とは違い、作家が人生で体験したことも表われていると考えられる。そのため、『人魚姫』を書いたアンデルセンと、『赤い蠟燭と人魚』を書いた小川未明が、それぞれの童話を書くきっかけになったといわれている事柄を、少しみていこうと思う。

1. アンデルセン アンデルセンは1805年4月2日、デンマークの古い田舎町オーデンセの貧しい靴修理職人の独り息子として生まれ育った。幼いころに父を亡くし、母が20歳も年の離れた靴職人と再婚したのを機に、14歳のアンデルセンはコペンハーゲンに向かった。着の身着のままの浮浪児だったアンデルセンを、王立劇場運営委員で王室顧問官のヨナス・コリンが救ってくれたことで彼の運は開けていった。アンデルセンは23歳でコペンハーゲン大学に入学し、劇作家としての才能を開花させ、作家として生きることを決意した。その後、アンデルセンは旅行人生を始め、旅先などで4度の失恋を経験した。『人魚姫』は、彼の経済的支援者であったヨナス・コリンの娘ルイーサに対する失恋がもとになっているのではないかと言われている。また、アンデルセンの父親が文学を好み、幼い彼に『アラビアン・ナイト』やデンマークの作家ホルベアアの喜劇ラ・フォンテーヌの寓話を読み聞かせたことが、アンデルセンの文学の出発点になっているようだ。

2. 小川未明 小川未明は1882年4月7日、新潟県上越市にあった旧高田藩の下級武士長屋に生まれた。上杉謙信を尊敬し、その居城跡に神社を建設することに心を砕いた父小川澄晴と、母千代の一人息子として育った。『赤い蠟燭と人魚』は、

未明の幼児期の体験に根ざして書かれた作品のようだ。小川（2000）は「家は代々子供が育たぬというので、私は産れると直に隣の蠟燭掛の家で三つになる頃まで育てられた」と述べている。また、未明は児童文学について「この孤立した日本を救ってくれるものは、子供を措いてほかにないのです。その子供に高い感激を与えるのは大切な仕事です。そこで児童文学の力が非常に大きいと思うのです。トルストイ、アンデルセン、よいものがたくさんあります。ああいうような、子供に力と正義の観念を与えるものでなければいけないのです。この約五十年の間、私はそういう考えで書いて来ました」と述べている。未明は雪深い土地で育ったため、雪のない、暖かく、明るい所が子供時代の憧憬だったようだ。『赤い蠟燭と人魚』の中の陸に憧れる人魚は、雪のない土地に憧れる未明と重なっているように思う。

・ 考察・まとめ

本研究は、二つの創作童話を比較分析したため、昔話にみられる普遍的無意識だけではなく、個人的無意識も介入している。しかし、太陽（蠟燭）と月という明暗をイメージさせるモチーフや、日常・非日常世界が海と陸とで区別されること、トリックスターの出現などを考えると昔話と同じように創作童話にも人間の普遍的無意識が現れているとみることができる。

日本の昔話に、『鶴女房』という異類婚の話がある。『鶴女房』は、鶴が貧しい男に助けられることから物語が始まる。助けられた鶴は人間に変身し、男と結婚する。そして、鶴女房は男への恩返しとして自分の羽できれいな織物を織り、男に尽くす。しかし、男が鶴女房との約束を破ったことで、男の生活は鶴女房に出会う前の状態に戻ってしまう。この話の作りは、『赤い蠟燭と人魚』と共通する部分が見られる。『赤い蠟燭と人魚』では、人魚の娘が貧しい老夫婦に拾われることから物語が始まる。助けられた人魚の娘は、老夫婦に大切に育てられる。そして、人魚の娘は老夫婦への恩返しとして手が痛くなるのを我慢して、蠟燭にきれいな絵を描き、老夫婦に尽くす。しかし、人魚の娘を裏切った老夫婦には罰が当たり、老夫婦の住んでいた町が滅びて話が終わる。この二つ

の話は、人間が異類の動物を助けることから物語が始まり、最期はその動物と人間が分かれることで終わる。つまり、『赤い蠟燭と人魚』は昔話の特徴を備えているといえるのだ。老夫婦は人魚の娘を、神さまのお授け子だから大切に育てなければいけないと思っていたのに、次第に人魚の娘が働くことを当たり前と思い、お金への欲を深めていく。欲深くなってしまったことが原因で、自らの破滅を招く結果となっている。このような結末は、人間の欲深さが醜いものだということを表しているように思う。また、人魚の神秘的な力を表したものだともいえる。

『人魚姫』は、見るな座敷に分類されるヨーロッパの昔話『忠臣ヨハネス』と共通する部分が見られる。『忠臣ヨハネス』は男性の主人公である王子が父親の禁止を破り、入ってはいけないと言われていた部屋に入り、黄金葺きの館の王女の絵を見てしまう。王女を愛してしまった王子は、様々な危険を克服して王女を獲得するという物語である。しかし、『人魚姫』は女性の主人公である人魚姫が、人間になりたいなどと考えるはいけないという祖母（母親）の禁止を破り、魔女に作ってもらった薬で人間の姿になる。人魚姫は、王子が人魚姫以外の女性と結婚したら死をむかえるという生命の危険を克服できない。そのため、人魚姫は王子を得られないうえに、自らの命も失ってしまうという結末が訪れる。しかし、人魚姫は永遠の魂を得られる可能性が示されて物語が終わるため、良い行いをすれば望みは叶うという希望が表わされている物語だといえる。また、主人公が永遠の魂を望むということから、宗教色が表われている話だともいえる。

二つの童話には、人魚という伝説上の生き物が主人公として取り上げられていることを始め、共通する部分が多数見られた。共通点がみられたことは、人魚についてのイメージが西洋と日本で共通していることの現れであり、相違点がみられたのは、アンデルセンと小川未明の育った環境や、宗教感の違いなどが影響していると考えられる。また、西洋での人魚は宗教との関係が深く、日本での人魚は妖怪のように不気味に描かれてきたことも関係しているだろう。そのため、『人魚姫』には魂について描かれ、『赤い蠟燭と人魚』では

人魚の持つ不思議な力が描かれていたのだろう。

筆者が人魚姫をかわいそうな話だと思ったのは、王子を助けたのは人魚姫であったのに、王子は隣の国の王女が自分を救ってくれたと勘違いしていたからだ。赤い蠟燭と人魚を怖い話だと思ったのは、人魚の神秘性に畏れを感じたからである。また、二つの話に出てくる人魚が、人に尽くしているのに、その想いが報われなかったことを悲しいと思った。『人魚姫』、『赤い蠟燭と人魚』共に、単純にハッピーエンドとはならない童話であるため、子供だけでなく、大人にも愛される作品なのだろう。

引用・参考文献

- Andersen,H.C. 大畑末吉 (訳) 2005 完訳アンデルセン童話集 (一) 岩波書店 119-156
- Jung,C.G. 1954 VON DEN WURZELN DES BEWUBTSEINS. Rascher Verlag, Zurich: 林道義 (訳) 1991 元型論 紀伊国屋書店 51-53 64-66
- Jung,C.G.und K.Kerenyi 1951 Einfuhrung in das Mythologie, Rhein verlag, Zurich: 林道義 (訳) 1990 続・元型論 紀伊国屋書店 103-105
- Jung,C.G., von Franz,M.-L.,Henderson,J.L.,Jacobi,J., Jaffe, A. 1964 MAN AND HIS SYNBOLS. by Aldus Books Limited,London.Japanese translation rights arranged through ORION PRESS, Tokyo: 河合隼雄 (訳) 1983 人間と象徴 河出書房新社 141-142
- Lurker, M. 1990 DIE BOTSCHAFT DER SYMBOLE, Kosel-Verlag GmbH&Co., Munchen: 林捷 林田鶴子 (訳) 2000 シンボルのメッセージ 法政大学出版局
- von Franz, M.-L. 1975 An introduction to the psychology of fairy tales, Spring Publications: 氏原寛 (訳) 1984 おとぎ話の心理学 創元社 144 186-191
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久 1977 日本昔話事典 弘文堂
- 小川未明 2000 作家の自伝103 小川未明
- 日本図書センター 46-48
- 小川未明 2004 小川未明童話集 新潮文庫7-21
- 金光仁三郎 1996 世界シンボル大事典 大修館書店 644 648 926
- 神谷敏郎 1989 人魚の博物誌 思索社
- 河合隼雄 1982 昔話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄 2002 子どもの宇宙 岩波書店 148
- 河原英介 1988 色彩の本 創元社 101
- 添田知道 1981 てきや (香具師) の生活 雄山閣出版 61-62
- 高橋健二 1862 グリム兄弟とアンデルセン 東京書籍株式会社
- 千々岩英彰 1999 図解 世界の色彩感情事典 河出書房新社 454
- 山祐嗣・山愛美 1998 行動と深層の心理学 学術図書出版社
- 吉岡郁夫 1998 人魚の動物民俗誌 新書館